デヴィッド・グレーバー著『負債論』（以文社）を読む

革命は始まっている

人民は呼びおこされるだろう

白石嘉治
SHIRAISHI Yoshiharu

▼デヴィッド・グレーバー著、酒井隆史監訳、高祖岩三郎・佐々木夏子訳『負債論――貨幣と暴力の5000年』!!・15刊、A5判八四六頁・本体六〇〇〇円・以文社

人民が欠けているといわれる。人権はあくまで人間の権利であり、けっして人民の権利ではない。欠落の直接の起源は、すくなくともフランス革命にまでさかのぼることができる。革命以前、ヴォルテールは市民を代弁し、ルソーは人民をみいだしていた。市民の実体は都市の裕福層であり、啓蒙された君主による改革をめざす。他方、いちはやくリンネの植物学に親しんでいたルソーは、人民による革命の出来を予感していた。

草木学の選択的な命名とはことなり、あらたに成立しつつあった植物学には無名のものはない、どのような雑草も、それ固有の名をもつ。この自然と個体の回路――おそらくそれがルソーのいう「全体意志」とは区別される「一般意志」なのだろう――のなかで、人民が革命とともにたちあらわれる。だが、実現されたのは、市民と人民の政治的な妥協としての人間の諸権利だった。以後、人間という抽象のもとで、市民による統治がはじまり、それにたいする蜂起のたびごとに人民の影がよぎることになる。

今日、グレーバーの『負債論』を読むことは、こうした人民をわれわれのもとに呼びおこすことである。ピケティとグレーバーの論争を想いおこそう。本書の「訳者あとがきにかえて」でもふれられているように、再配分の強化というピケティの処方には、グレーバーは否定的である。二〇世紀中盤にみられた資本の中間層への転移は、社会主義諸国の存在や強力な労働組合の圧力なしにはありえなかったが、そうした条件はもはやうしなわれている。それにたいしてグレーバーが強調するのは、ひとびとが負債を契機に立ちあがり、くりかえし債務が取り消されてきた歴史的な現実である。

じっさい二〇一〇年のウォール街の占拠では、ピケティよりも『負債論』が参照されていたはずである。すくなくとも、そのスローガン「一%と九九%」を案出したのはグレーバーだった。ピケティは市民による改革をもとめ、グレーバーは人民の蜂起にねざそうとする。ヴォルテールとルソーの対峙が反復されているのだろうか？　われわれは革命の途上にあるのだろうか？　いずれにせよ、グレーバーは世界を借金漬けにする現体制の「破局」はさけられないという。われわれはふたたび「世界の出来事の流れに変化をもたらすことのできる民衆」となり、「負債のモラリティー」はなりはらわなければならないという。そのために五〇〇〇年の世界史が語り直される。

そして「軍事＝綺貨＝奴隷制複合体」という定式にたちつつ、さいしょに物々交換があったのではない。それは経済学者たちの夢想にすぎない。歴史学や人類学がしめすところによれば、原初的な状態でみられるのは「信用」による取引である。見知った者のあいだでは、貨幣を介したやりとりは必要がない。遠方からの商人には、なんらかの対価をもとめることもあったろうが、それは例外にすぎない。だが、数万人の兵士を擁した古代国家の兵站は、貴金属で鋳造された貨幣でまかなうほかない。国家はその征服地に貨幣の流通する市場をつくり、さらには市場に投入した貨幣を税としてとりたてる。奴隷は戦争の捕虜だけでなく、市場や徴税がもたらす負債によっても恒常的に供給される。文明の歴史のはじまりである。

こうした「軍事＝綺貨＝奴隷制複合体」は、古代国家だけにみられるのではない。グレーバーが人類学者として調査したマダガスカルでも、一九世紀にフランスによって植民地化されるさいには同じことがおきている。「文明化」の名のもとで貨幣が導入され、ひとびとは重税と負債の支払いのために奴隷へと転落していった。あるいは、今日のIMF体制についても、同様の機制が反復されているといえるだろう。本書の冒頭でも言及されるように、アラブ諸国がオイルショックによってえた膨大なドル――その裏づけはアメリカの軍事力である――は、スイスの銀行を経由してアフリカ諸国に高利で融資された。取り立てにあたるのはIMFである。この金融によるコントロールこそ、第二の植民地化であり、政治的には独立したアフリカ諸国にたいする経済的な奴隷制にほかならない。

しかもグレーバーが注意を喚起するのは、「軍事＝綺貨＝奴隷制複合体」の典型だった古代ローマにおいて、法的な所有概念が誕生したことである。一般に、法律はひとびとの関係をとりきめる。それゆえ所有とは、法的には万人にたいするものの使用権である。だが、だれも万人との関係をとりむすぶことはできない。この難局を回避するために、ローマ法は主人と奴隷との関係をすべりこませる。主人が奴隷にたいして絶対的な関係をとりむすぶことができるように、ひとは特定のものを独占的に使用しうる。こうしてローマ法によって所有権が確立されるが、注意すべきは、まず主人と奴隷の関係があり、所有という概念はその派生物にすぎないことである。奴隷はひとをものあつかいすることにはない。ものを奴隷とみなすことが所有するということである。

われわれはものの所有を自明とみなし、負債は返済すべきとかんがえている。だが、それらの起源には奴隷制がみいだされる。負債は奴隷をうみだし、所有は暗黙に奴隷制に裏打ちされている。人民を呼びおこすために世界史を遡歴したグレーバーの問いはあきらかだろう。わ

【2面へ……】

【……1面から】

れわれの「モラル」が奴隷制を容認できないのならば、負債はどうせん取り消されるべきではないのか？　同じ理由で、法的な所有概念についても根本的なみなおしが必要なのではないか？　こうした問いかけに、グレーバーによれば、世界宗教の教義はなかば無力である。世界宗教は「軍事＝鋳貨＝奴隷制複合体」とともに成立し、その枠組みのなかで反転をこころみるが、けっして枠組みじたいの破壊へといたることはない。

『負債論』とともに、革命ははじまっていると断定しよう。それは夜の盗人のようにやってくるのだろう。標的は今日のIMF体制や金融資本だけではない。三〇〇年にわたる経済という概念のくびきであり、国家の「軍事＝鋳貨＝奴隷制複合体」である。問われているのは、パンかバラかではない。取り引きには応じてはならない。われわれはパンもバラもともにもとめる。グレーバーは、そうしたパンとバラの共振する境位をさして端的に「コミュニズム」とよぶ。それは国家の「ヒエラルキー」も経済の「交換」も知らない。だからイヌイットは、感謝のことばに魔真をかぎつけ、サモアの島人は勤労を説く宣教師をやりこめるのだろう。こうした「勤勉ではない貧者」のふるまいに「コミュニズム」はやどる。そこでは、ものは共有されるのではない。ものを奴隷とみなさず、感性的な関係がとりむすばれる。人民は所有するのでなく、ただ愛着をいだくだけである。パンはバラとなり、バラはパンとなる。海がレモネードとなると語ったかつてのユートピア主義者をあらためて言祝ぐべきなのだろうか？　たしかなことは、ひとは奴隷であってはならないし、ものに愛着をいだくのはとうぜんであることである。この「モラル」のゼロポイントを肯定するならば、負債はしりぞけられなければならない。くりかえすが、人民は呼びおこされるだろう。われわれは石を割り、借用書を焼きはらうだろう。ルソーの放った矢は、ふたたびクレーバーによって虚空に放たれたのである。

（フランス文学）